

例会要旨

2009年10月10日
於 筑波大学東京キャンパス

地域資源としての在来野菜品種の保全と活用 —山梨県丹波山村の在来種ジャガイモを例として—

清水克志 ((独) 農研機構農村工学研究所)

地域の風土に順化し、今日まで受け継がれている在来野菜品種は、消滅が危惧される品種も少なくない。本報告では、在来野菜品種の保全と活用を通じて、現代日本の農村地域が抱える諸問題を解決し、地域振興に資する方途を探る実践例を紹介した。

事例とする山梨県丹波山(たばやま)村は多摩川上流水源域の山村地域で、とりわけジャガイモは急傾斜地での栽培に適し、冷害に強いことなどから、重要な作物として位置づけられてきた。

前半は文献資料や統計処理、聞き取りなどに基づき、丹波山村周辺地域が近世におけるジャガイモの導入先進地で、全国的にみて数少ない、在来品種の現存する事例の1つとなっていることなどを示した。また全村悉皆調査から、丹波山村の在来種ジャガイモが、遠からず消滅の危機に瀕する状態にあることを示した。このような地理学、とくに歴史地理学が蓄積してきた現地調査のノウハウを活用することは、在来野菜品種の地域資源としての価値査定に有効なだけでなく、その結果を地域住民に提示することを通じて、住民自らが地域固有の伝統文化を再認識し、在来野菜品種の保全意識を高める効果があることを指摘した。

後半は、これからの取り組み計画について紹介した。当面の目標としては、種(しゆ)の保存や耕作放棄地の再活用、栽培技術の共有を多様な主体の参画によって推進することである。さらに、地域ブランド化や地場産品の考案、都市農村交流イベントの開催に向けた実践例などを具体的に紹介した。

研究者の実践とその可能性 —地域復興支援員の経験をもとに—

渡邊敬逸 (小千谷産業開発センター 地域復興支援員)

発表者は2009年4月より地域復興支援員として、自らの「調査」と「研究」のフィールドである新潟県小千谷市東山地区に「支援」という、より実践的な側面から地域に関わっている。本発表では、発表者の地域復興支援員になるまでの経緯とその後の経験を通じて、「調査」や「研究」とは異なる、研究者による実践の可能性について検討した。

なお、新潟県小千谷市東山地区は2004年10月に発生した新潟県中越地震において壊滅的な被害を受けた地域の一つである。地域復興支援員は、東山地区をはじめとする被災地のコミュニティ機能の維持・再生を目的として配置される専門職員であり、新潟県中越地震復興基金の事業として制度化されている。

フィールドでの実践は、地域住民との協働を通じて、様々な個別の活動を紡ぎ合わせながら「地域復興」という目標へ向かう、いわばアクションリサーチである。こうした共同的な実践は、単純に楽しい反面、様々な困難を孕んでおり、発表者はこれを上手くファシリテートしなければならない立場にある。ただ、その過程から得られる知見は、「住民の視線」という手垢のついた言葉に実践的な説得力を与えるものである。また、自らの「調査」・「研究」へのダイレクトな影響という点では、アカデミックの中で培ってきた研究対象への視角や研究手法を「住民の視線」から相対化し、自らの活動に説得力を付与する可能性がある。